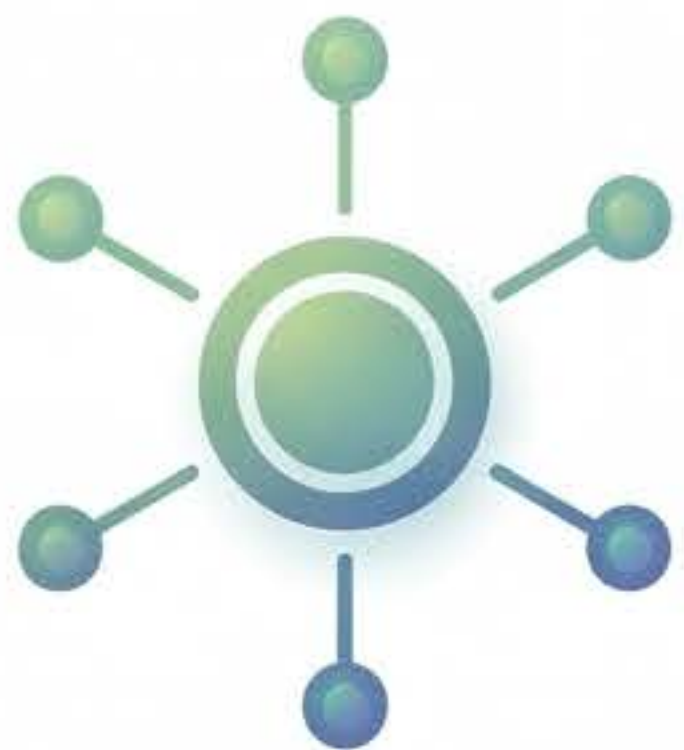


知財AIのパラダイムシフト：2025年「点」の効率化から2026年「面」の戦略設計へ

国内最大の「知財・情報フェア」における展示内容の変更を分析。AIの役割が「単一書類の作成支援」という受動的なツールから、競争を排除する「特許細（ポートフォリオ）の自律的なアーキテクト」へと進化した過程を解説します。

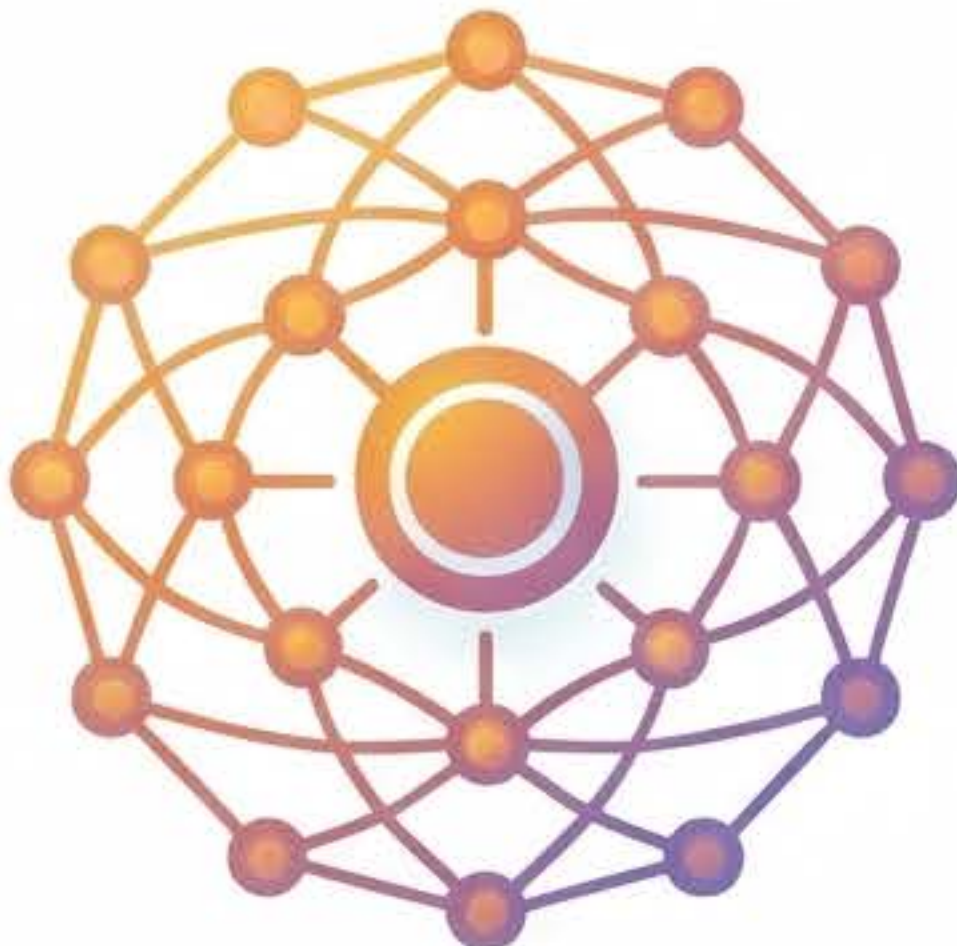
2025年（第34回）：「点」の効率化

2026年（第35回）：「面」の戦略設計



「点」の効率化から「面」の戦略構築へ

単一公報の要約やドラフト作成から、複数の周辺特許を連携させる網羅的設計へ移行。



AIがインフラへと定着

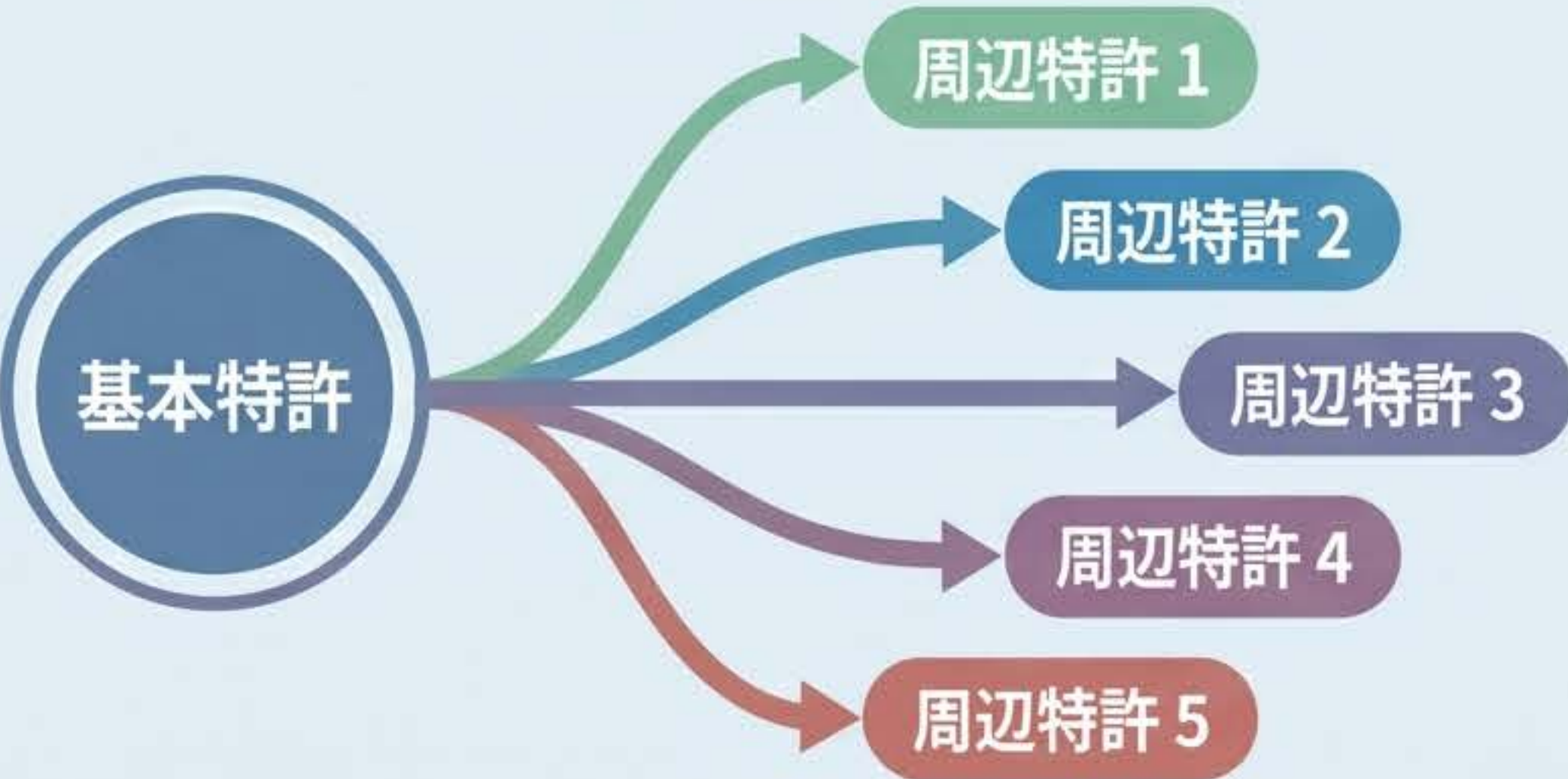


2026年フェアでは講演の約67%に生成AI関連のテーマが含まれた。

2025年（第34回）		2026年（第35回）	
「点」：単一明細書の作成・要約	対象スコープ	「面」：基本特許から周辺群を自動生成	
作業代行（Co-pilot型）	AIの役割	戦略的アーキテクト（自律エージェント）	
個別インポート（データサイロ）	データ連携	MCPによる特許DBとのシームレス直結	

マルチLLM合議とDB直結(MCP)の採用

異種モデルの議論により死角を排除し、特許DBとAIを直接連携させる環境が実現。



次世代の「包囲網」構築と新たな課題

周辺特許5～6件を5分で自動導出

基本特許を起点に、代替部材や用途展開を予測した周辺特許群を瞬時に設計する。

「作成」から「選別・ガバナンス」へ

AIによる特許量産時代、真に有効な権利を見極める投資対効果の判断が経営課題に。



人とAIの責任分界

AIが網羅的な案を出し、弁理士が法的責任と事業整合性を監査する体制へ。